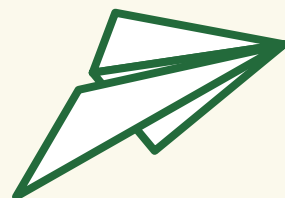


FUTURE!

2024年度 こども応援金報告書



◆児童養護施設・里親家庭等進学応援金

◆自立援助ホーム・子どもシェルターまなび応援金



お礼

私たちは2008年に児童養護施設や里親家庭の高校生の大学などへの進学支援を開始し、11年の東日本大震災では両親を亡くした子どもたちへの応援金、20年には新型コロナウイルス緊急学生応援金を実施するなど、困難な状況にある子どもや若者のための「こども応援金」をおくってきました。

24年度は、児童養護施設などで暮らすのべ754人の子ども、若者に総額8975万1741円の学びのための応援金をおくることができました。

本報告書では、給付や子ども、若者の状況などをご報告させていただきます。

このように子どもたちを支援できるのは、ご寄付をくださる皆さまのおかげです。誠にありがとうございます。朝日新聞厚生文化事業団では、皆さまの思いをもとに、子どもたちの希望ある未来を拓くとともに、社会に思いやりの輪が広がることを願いながら、これからもこども応援金プロジェクトに取り組んでまいります。

今後とも、ご支援、ご声援をいただけますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

朝日新聞厚生文化事業団

2024年度
社会的養護で育った子ども・若者への給付実績

のべ754人
総額8975万1741円

※すべて返済不要の給付型奨学金として
※一部の入金手続き中を含みます

2024年度 ご寄付の状況

2024年度も多くの皆さまから温かいご支援をいただきました。

心からお礼を申し上げます。

こども応援金事業への寄付額は総額4045万8658円となりました。以下のように内訳をご報告します。

「児童養護施設・里親家庭等進学応援金」は1976万2083円(383件)、「自立援助ホーム・子どもシェルターまなび応援金」は2069万6575円(329件)です。

朝日新聞厚生文化事業団への直接のご寄付のほか、クラウドファンディングサイトREADYFORを通じてもたくさんのご支援をいただきました。

困難な状況にある子どもたちの未来のために大切に活用させていただきます。

こども応援金事業

ご寄付の種別	寄付件数	寄付金額
合計	712件	40,458,658円

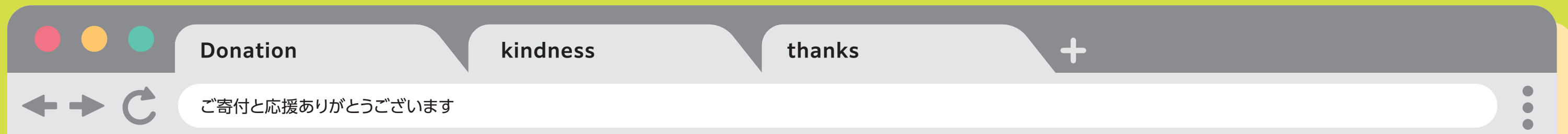
児童養護施設・里親家庭等進学応援金

ご寄付の種別	寄付件数	寄付金額
READYFOR(クラウドファンディング)	182件	4,266,000円
朝日新聞厚生文化事業団への直接寄付	201件	15,496,083円
合計	383件	19,762,083円

自立援助ホーム・子どもシェルターまなび応援金

ご寄付の種別	寄付件数	寄付金額
READYFOR(クラウドファンディング)	166件	3,855,000円
朝日新聞厚生文化事業団への直接寄付	163件	16,841,575円
合計	329件	20,696,575円

※「こども応援金(一任)」でいただいたご寄付は、進学応援金、まなび応援金に案分して計上しています



ご寄付と応援 ありがとうございます！

学びの楽しさと感謝を力に



学ぶことってすごく楽しいなって日々感じています。大学で学んでいることを当たり前だと思わずに、感謝しながら過ごしていきたいです。そして、将来たくさんの人に応援してもらった分、子ども達に還元できるように働きたいです。（かな 20歳）

応援がくれた、かけがえのない日常



皆さまの応援のおかげで、私たちは勉強やアルバイトに励みながらも「普通の大学生」と同じような生活を送ることが出来ています。大学に通えて、一人暮らしが出来て、友達ともたまに遊んで、健康で文化的な「普通の生活」が出来ているのは皆さまのおかげです。しっかり勉強して、皆さまの応援に応えられる社会人になれるよう頑張ります。（あい 21歳）

手を差し伸べることのできる素敵な人に

皆さまからの応援金のおかげで自分の夢を叶えることができ、4月から社会人として働くことが決まっています。皆さまのような、困っている人に手を差し伸べることのできる素敵な人になりたいと思っていますし、これからはひとりの社会人として、自分にできる形で社会に貢献していきたいと思っています。これからもよろしくお願いします。（なな 22歳）



諦めかけた夢が、現実になりました

中学生の頃からの夢だったシステムエンジニアとしての就職が決まり、大学へ進学して良かったと実感しています。奨学金をいただいたことで、アルバイトの時間をインターンに充て、スキルを身につけることができました。高校時代はアルバイト漬けで成績がとても悪く、夢を諦めかけたことがありました。しかし、奨学金の合格通知をいただいたことで、夢を諦めずに進学して勉強したいと思えました。

これからは、今まで自分がいただいた皆さまからの想いを、次の世代の子どもたちへ引き継ぎ、より幸せの輪を広げていけるよう尽力したいと考えています。

4年間、ありがとうございました！（はるな 22歳）



ひとりじゃないと気づけた1年



施設を退園し、1人で生活を始めたこの1年をふりかえってみると、不安に思ったり辛いと感じたりすることがたくさんありました。でもそんな時に、「頑張れ」と応援してくれる人がいることが、どれほど心強くて前向きな気持ちにさせてくれるのかを実感しました。

これまで、多くの人に支えられて生活してきたからこそ、誰かがそばにいてくれる安心から、それが当たり前のことではないことに気が付きませんでした。

でも、1人になったことで、今はそれが当たり前ではないと気が付き、そして、幸いにも私には応援してくれる方々がたくさんいてくださるということを実感しています。

この1年間、想像できなかったことがたくさんありました。でも、支えてくださる皆さんの応援で頑張ることができました。本当にありがとうございます。

これからも夢に向かって、一生懸命頑張ります。（みお 19歳）

不安だった進学が、希望に変わった



高校生の頃、大学へ進学したら、学費や生活費に追われて何も楽しめないと思っていましたが、皆さまの寄付金があるおかげで、学費を自分で払う負担が減り、学業の他にも大学生活を楽しむことが出来ています。これからも日々皆さまに支えられていることを頭に浮かべながら学業に励んでいきます。（ゆい 19歳）

夢を追い続けられる毎日に感謝



友人との関係や自分の趣味なども大切にしながら自分の夢を追いかけ続けられる環境で生活できるのは、本当に皆さまのおかげです。応援してくれる人がいるという実感があるからこそさらに自分の夢に自信を持つことが出来ています。本当にありがとうございます。（あおい 19歳）

自分の夢に自身をもてました

毎日楽しく生活させていただいています。資格を目指していきながら、学生でできることをひとつでも多くしたいと思っています。ありがとうございます。（さとり 19歳）



2024年度の給付報告

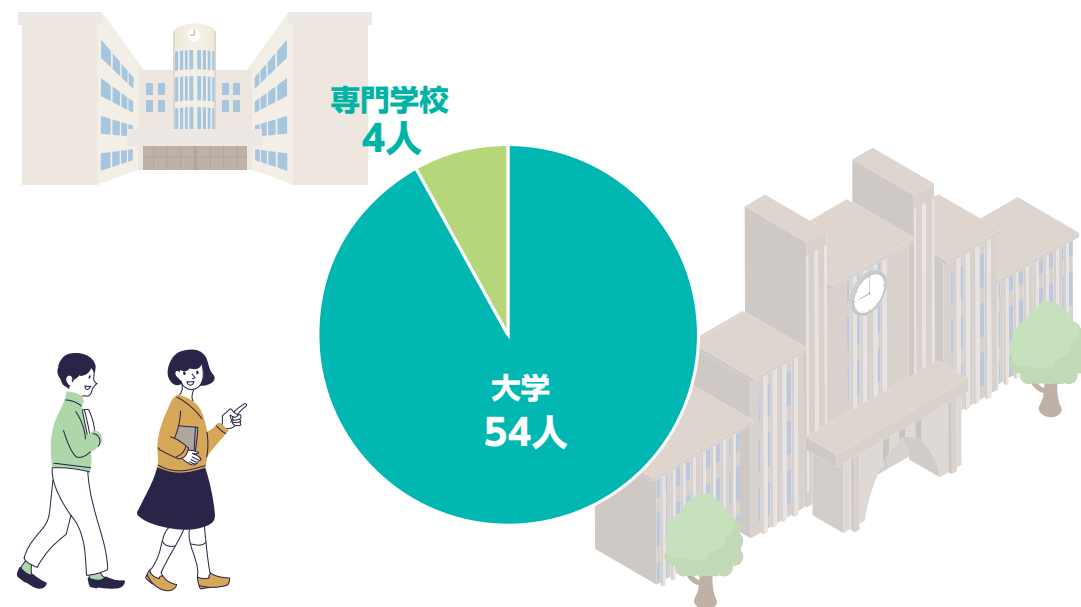
2024年度は新入生16人、在学学生42人の計58人に総額1915万円を給付しました。

在籍種別は大学54人、専門学校4人です。短大生はいませんでした。

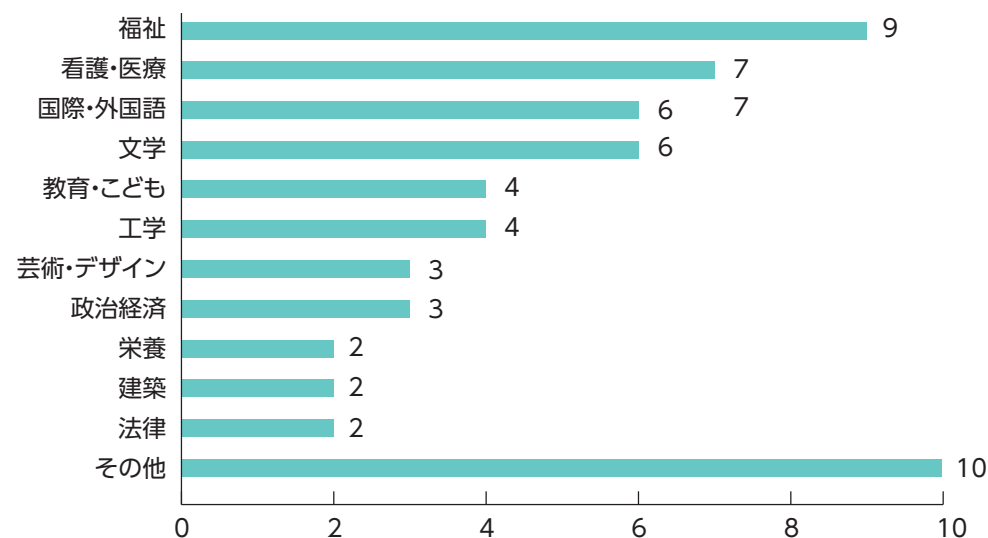
専攻は「福祉」が最多の9人。以下、「看護・医療」7人、「国際・外国語」・「文学」がともに6人などと続きます。このほか、留学での休学が2人、中途退学が4人でした。

今春に卒業したのは11人。進路は看護師、保育士、小学校教諭、児童養護施設職員、インターネット広告デザイナーなどとなっています。

学校種別と人数



専攻内容と人数



※人数などは2025年4月1日時点。

25年3月に1045万円を送金済みで、残りは9月に送金予定です。

※進学応援金は、みなさまからのご寄付と山岡子ども応援資金などを原資にしています。

特集 応援生たちの挑戦～支援をつなぎたい～

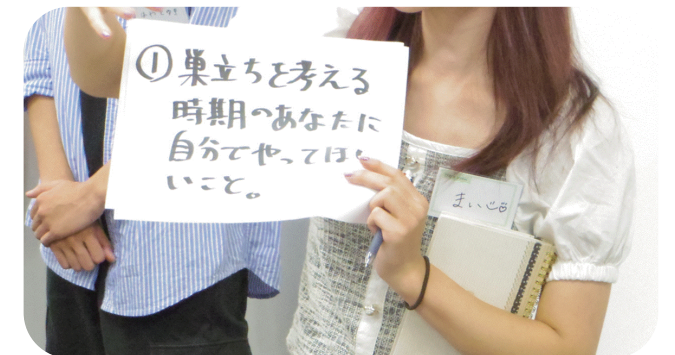
社会を変える若い力 ―当事者だからこそ見える課題に挑む―

「児童養護施設・里親家庭等進学応援金」を受けている応援生たちが、自らの経験をもとに、社会的養護から離れる日が近づき不安を抱える中高生に将来のロールモデルを示す活動や、養育の現場をより良くするための発信に精力的に取り組んでいます。北九州市で開催されたセミナーを中心に報告いたします。

「こどもと養育者」「制度と現場」間のずれを追究

北九州市の児童養護施設天使育児園で、2024年9月20日に養育関係者ら30人が参加して開かれた「こども応援シェアセミナー」は、社会的養護の現場で生じている課題について深く掘り下げる機会となりました。

テーマは「こどもと養育者の間、現場と行政や社会的養護の仕組みの間に生じているずれ」。応援生たちが社会的養護の子どもに向けたイベントの内容を考えるために、養育関係者にヒアリングを行った過程で出てきた問題意識です。イベントとは別に深掘りする機会をつくりたいと、大人を対象にしたセミナーを計画。応援生4人が登壇し、中高生のころに感じていた「施設のルールと子どもの要望の間にある溝」「自立への不安と支援の現実」などの課題について、自分たちの言葉で率直に伝えました。



中高生とのグループワークで進行を務める応援生

帰れる場所や幼なじみの存在が支えに

施設や里親家庭が「帰れる場所」であることが、自立後の大きな支えとなり、困難な状況でも「なんとかなる」と思える力になると、4人は共通して「帰れる場所」「安全基地」の重要性を強調しました。

5歳までを施設、その後20歳まで里親家庭で暮らしたかつみさんは、大学進学時の不安が軽減されたのは、里親さんや施設職員が常に「帰ってきていいよ」「困ったら相談していいよ」と伝えてくれていたからだと言いました。

また、5歳から18歳まで児童養護施設にいたしょうむさんは、全国的に進んでいる大規模施設から小規模施設への移行について、子ども一人ひとりへの支援が手厚くなる一方で、同年代の子ども同士のつながりが希薄になるという課題を指摘。幼なじみの存在がケアを離れた後の支えになっている自身の経験を踏まえ、施設内や運営法人内での子ども同士の交流を大切にすべきだと提案しました。



セミナーの会場の様子

家族や親を悪く言わないで

子ども本人が知らない生い立ちを伝えることについて、しょうむさんは「職員には子どもの家族や親について悪く言わないでほしい」と訴えました。親の良し悪しを決めるのは第三者ではなく子ども自身であるべきだという考えからです。将来を考え始めたり過去を整理しようとしたりする、子どもが必要とする「適切なタイミング」で、情報を段階的に伝えるべきだと述べました。

悩んだり納得したりする過程で寄り添い支えることが職員の役割で、大人の考えで一方向的に話すのではなく、子どもの心情に寄り添う関わりの重要性を指摘したこの発言を、参加者はうなずきながら聞いていました。

自立への不安、助けられた支援

自立に向けての様々な不安についても語りました。進学時の経済的な不安、不慣れな手続きへの不安、目標が見つからないこと、ロールモデルがないことなどが挙げられました。

ケアを離れて一人で生活していく上で、身近に頼れる人がいることが大きな安心感や自信につながります。しかし、頼るのが苦手な場合もあるため、信頼できる関係性を巣立ちの前に築くことや、社会資源との繋がりを作っておくことがとても大切だと応援生たちは口々に強調しました。

お金の管理も大きな課題です。中高生の時に児童養護施設に入所していたゆめかさんは、中学生の頃から小遣い帳をつける習慣が浪費癖を抑えるのに役立っていると話し、かつみさんは里親との相談を通してお金の使い方を決めた経験から、使い道を一緒に考えてくれる関わりが重要だと語りました。

その中で「奨学金を『借金』と感じて進学を諦めた子」の話も出され、現在は給付型奨学金が充実してきているという正しい知識と「なんとかなるから頑張ってみて」と後押しする支援の必要性が確認されました。子どもは施設を選べない中で、施設によって支援の内容に差があることへの問題提起もされました。

締めくくりとしてしょうむさんは、「子どもたちは、親のことや入所するまでのこと、これからのことなど様々な不安がある。近くにいる養育者の方に話を聞いてもらって一緒に考えてもらう中で、やっと将来を見られるようになると思う」と養育者の日々のかかわりの積み重ねが子どもたちの力になることを話しました。

寄付がつなぐ希望の連鎖

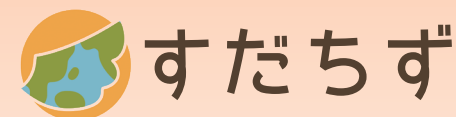
名古屋市でも24年9月29日に「進学情報シェアセミナー」が開催され、応援生ら7人が登壇しました。進学・巣立ち体験談や何でも質問コーナー、グループトークなどが行われ、参加者からは「頑張りたいなと思いました」「似たような環境で過ごしている人たちの話を聞くだけで安心しました」「またやってほしい」といった声が寄せられました。

二つのセミナーを通じて、当事者視点で体験を語り、解決に向けた具体的な提案を行ったことは、同じ経験を持つ子どもたちに希望を与えるだけでなく、社会的養護の現場や制度の改善にも貢献するものと私たちは考えています。

後に続く世代のために、これまで言いにくかったことも人前で臆せず語る応援生たち。自分が成長したいという思いや望む人生を歩むための努力を、見知らぬ誰かが認めてくれ、ご寄付という形で後押ししてもらったことが、その自信と勇気、自分も誰かのために役立ちたいという気持ちをはぐくみ支えています。



セミナーで体験などを話す応援生



自分らしく未来を描くための羅針盤

応援生がアイデアを出し、多数の専門家や施設等の生活経験のある方々の協力を得て完成させ、現在も更新を続けているウェブサイト「すだちす」では、施設や里親家庭で暮らす子ども特有の悩みや不安、疑問に対して、具体的なアドバイスや経験談、心のこもったメッセージを見ることができます。

経験があるから、寄り添える

例えば、家族との関係に不安を抱える高校生に対して「(自分が) どうしたいかが、とても大切」「今すぐ決める必要はない」と個人の意思決定を尊重するメッセージを送っています。自分だけが社会的養護によって助けられ、母親は助けられなかったと自責の念を持つ若者には「あなたのせいじゃない」「あなたが笑って未来を生きている事をお母様もきっと願っているはずです」と寄り添います。

アルバイトで苦勞しながら進学準備をした若者には「その経験がこれから活かせる」「未来の自分からのメッセージは『頑張ってくれて、ありがとう』と、その努力の価値を力強く伝えています。

そして「一人で抱え込まないのが大切」「気持ちを言える場所、見つけよう」「私はいつでも、〇〇さんの味方です

よ^^』といった、寂しさや孤立を感じがちな若者をいたわる言葉も続きます。

社会的養護を経験した若者たちが自身の権利を知り、利用できる社会資源を最大限に活用するための具体的な道筋も示しています。

進学、就職、住まい、生活費、公的手続きなど、巣立ち後の生活で直面する様々な課題に、「どんな制度が使えるのか」「どこに相談すればよいのか」といった実用的な情報が整理され、今後も情報の更新を行っていく方針です。

「一人じゃない」を伝えていく

「すだちす」を運営する応援生たちは、自分たちの経験を強みに変え、社会に働きかけています。自らが直面した困難を振り返り、後に続く子どもたちが遠回りをしないで済むように情報を整備し、励ましのメッセージを送り続けています。

このプロジェクトを通じて、社会的養護という共通の経験を持つ若者同士のつながりが生まれ、「社会的養護で育っても一人じゃない」というメッセージが広く伝わっていくことを、私たちも願っています

学生たちの思いから生まれた「奨学金団体交流会」

応援生たちは「Miomus」という、社会的養護を経験した子どもたちのための奨学金検索サイトを運営しています。子どもたちに奨学金の情報などが届きにくいという状況を改善したいと考えてのものです。

サイト運営を通じて様々な奨学金団体と関わる中で、学生たちは一つの気づきを得ました。奨学金を運営している団体も「限られた資金の中での運営」や「中退してしまう学生へのサポート方法」など、様々な課題を抱えているということです。「もし団体同士が悩みを共有し合い、共に解決策を見つければ、より多くの後輩たちを支援できるのではないか」

この思いから、応援生が中心となって「奨学金団体交流会」を企画しました。当初は「本当に交流会は必要なのか」「開催しても誰も来てくれないのでは」という不安もありましたが、複数の団体との対話を重ね、その必要性を確信して開催に踏み切りました。



奨学金団体交流会でのグループワーク

交流会は2024年11月9日、朝日新聞東京本社内で13団体が参加して開催しました。

各団体による奨学金紹介に続き、パネルディスカッションでは初めて運営を経験する1年生が企画から司会進行までを担当。登壇した4名の応援生も、自信を持って自分たちのリアルな生活状況や奨学金に対する思いを語りました。

グループワークでは、奨学金団体がそれぞれに抱える課題について語り合う時間を設けました。後半は各グループに応援生も加わり、奨学金の応募や面接について正直な意見を伝えると、各団体からの参加者は真摯に受け止め「どうしたらもっと良くなるだろうか?」と一緒に考えました。

参加者からは「応援生の皆さんのバイタリティに感動するとともに、私たち財団側もさらに真剣に、学生の方たちをサポートしていかなければならないと気持ちが引き締められました」などの感想が寄せられました。

児童養護施設・里親家庭等進学応援金 新規奨学生募集終了のご報告

2008年に始まり16年間で約430人に応援金を届けてきた「児童養護施設・里親家庭等進学応援金」は、2024年度をもって新規の奨学生募集を終了することとなりました。

本応援金は、民間の給付型奨学金が限られていた時代に、入学時に最大100万円を支給する形でスタートし、後に「安心して学び続けられる」ために卒業まで継続して給付する制度へと発展しました。皆さまのご支援により、多くの若者の夢を支えることができました。

近年、民間奨学金や自治体の支援が拡充され、2020年には国の奨学金制度も大きく改善。児童養護施設の養育に詳しい専門家からは「経済的理由だけで進学できない状況ではなくなった」との評価が聞かれるまでになりました。

しかし、社会的養護で育った若者の四年制大学進学率は20.9%にとどまり、全体の進学率57%（2023年5月）と依然として大きな開きがあります。

私たちは、この格差の主な原因が「情報格差」にあると考えています。そのため今後は、子どもたちに次の情報を届ける活動に注力してまいります。

進学が進路の選択肢になりうること

進学準備のための具体的なステップ

実際に進学した先輩たちとの交流機会

また、より支援が届きにくい子どもたちへの新たな取り組みとして、2025年度から「地域こどもつなぐ応援金」を開始いたします（詳細は17ページ）。

「ぴあ応援団」誕生 —社会的養護経験者による新たな挑戦—

皆さまからの温かいご寄付が結実し、社会的養護のもとで育った若者たち自身による新たな組織「ぴあ応援団」が2025年4月1日に正式発足しました。

これまで応援金受給学生の有志が「ぴあ活動」として取り組んできた後輩支援や社会的養護の発展活動が、全国的なネットワークを持つ団体として独立。彼ら自身の「自分たちにしかできない貢献をしたい」という強い思いが形になりました。



ぴあ応援団のHP用に学生たちが撮った写真

「活動したい」と希望する全国の仲間とともに

私たちは、応援団メンバーと話し合いを重ねる中で、今後の活動の発展のために2つの課題を整理したいと考えました。

一つ目は、これまでのぴあ活動は進学応援金を受けている学生による活動でしたが、メンバーではない学生から「一緒に活動したい」という希望が聞かれるようになってきました。また、進学は一つの大切な選択肢ですが、メンバーの中には進学せずに就職した人がおらず、中高生や養育者の方々に多様な情報を届けるという部分では対応しきれないことがありました。

こうした課題を解決するために、進学応援金を受けているかどうかを問わず、社会的養護の生活を経験し、後輩たちのために一緒に活動したい希望する仲間を全国に募り、一緒に活動をしていくこととなりました。早速、過去に実施したセミナーで出会った新しい仲間が、4月1日から加わってくれました。

広がる活動とご支援の輪

すでに児童養護施設や里親家庭の養育者が集まる全国大会での意見表明、各地での中高生や養育者向け体験談セミナー、全国の社会的養護経験者による交流会など、様々な活動が準備、展開されています。

皆さまのご支援をもとに学び、社会に貢献したいとの気持ちを育んできた彼ら、彼女らの取り組みを、今後とも見守っていただけますよう、お願いいたします。

新応援生に決まった 子どもたちの横顔

2024年度には新たに16人の新入生に進学応援金をおくりました。そのうちの2人の横顔を紹介します。またご寄付くださった方からのメッセージも一部掲載いたします。

新応援生の声

自分たちのような子どもに役立ちたい

「私たちのように家庭に恵まれなかった子ども、育ちにくさや障害のある子どもに、少しでも役立ちたい」

Aさんは、0歳から暮らした乳児院で出会った保育士さんの影響を受け、児童福祉を学ぶために進学を目指しました。

高校で続けた部活では部長を務め、学業もアルバイトにも熱心に取り組んできました。

育ててくれた里親さんへの恩返しの思いも込めて、後輩たちのためのぴあ活動に参加したいと意気込んでいます。

「周りの人に助けられ、立ち上がってきました」

Bさんは、虐待を受けながら育ちました。

高校生のときに摂食障害が悪化し、精神科の病院への入退院を経験。

「何度もくじけそうになったけれど、周りの人に助けられて立ち上がってきました」と当時を振り返っています。

自分自身の経験から、児童養護施設で暮らした子どもが「かわいそう」などと同情されるのではなく、一人の人として対等にかかわってもらえる社会を目指し、ぴあ活動に参加したいと希望しています。

ご寄付いただいた方からのメッセージ

頑張って！なんて言いません。それまで色々辛いことが有ったろうから。努力して良かった！と感じられるコトかモノにたくさん巡り合えますように。

学びは未来の可能性を拡げ大きくしてくれます。諦めずにチャレンジしてください。

練習や勉強の努力は裏切らない！ コツコツでいい、でもそのコツコツを「続ける努力」が大切です。あきらめないこと、続けること、自分自身に負けないこと。応援しています。

支援してくれる大人は周りに必ずいます。苦しい時は周りの大人に頼ってください。皆さんの頑張りを応援しています。

皆さんの学びたいという希望が叶いますように微力ながら応援させていただきたいです。頑張ってください！

どんな困難があっても、必ず応援してくれる人たちがいる、と信じて、気持ちを強くもち、前に進んでください。

まなび応援金 子どもたちと施設の

思い

申し込んだ子どもたち、支える施設の方々の
思いの一部を紹介します。

ホームで芽生えた新たな決意

親からの虐待により、ホームに入居しました。学校にも通っていたのですが、親の判断により辞めさせられています。入居し生活を送っている間に、『きちんと高校卒業の資格がほしい』などと自分の思いを伝えられるようになりました。

（自立援助ホーム長）



揺れる心と体、それでも前へ

一時は母親からの執拗な脅迫や外出への恐怖などもあり、生活を整えること自体が困難な状況でしたが、弁護士や職場のサポートを通じて、ステップを踏めるようになりました。体調もメンタルも不安定ながらも暮らしを頑張っています。

（自立援助ホーム長）



自分の人生を歩んでほしい

母親の精神疾患と義妹の面倒をみるために自分の人生を生きることができていませんでした。入居してからは高校に再入学し、高校卒業の資格取得のために、日常生活や学校生活に一生懸命取り組む姿は頼もしい限りです。本人が持っている力を伸ばしていくためにも、応援をよろしくお願いいたします。

（自立援助ホーム長）

苦手な勉強にも全力で

中学では休みが多かったけれど、高校に入学してからは、体調が優れないときも朝早く起きて、6時にホームを出て、毎日学校に通っています。大変ですが、保育士になるためには短期大学進学が必要です。苦手な勉強もたくさんの人に教えてもらいながら取り組んでいます。学校では、保育検定、食物検定、被服検定もあるので、検定合格のために、毎日頑張っています。

（自立援助ホーム 高校1年生 ことね）



助けられた経験を力に社会福祉士へ

私の将来の夢は、社会福祉士になることです。資格を取得して、こども家庭センターや一時保護所で働きたいです。私自身、こども家庭センターの方に助けられたり、一時保護所にいたりした経験があります。経験したことがあるからこそ、そこに来るこどもたちの気持ちが理解できたり、寄り添えたりすることがあると思います。過去を将来に活かしたいと思います。

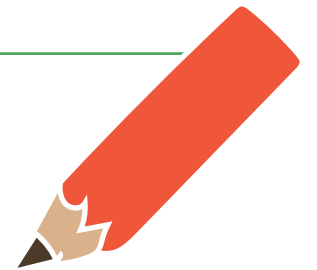
（自立援助ホーム 高校1年生 さとみ）



支援実感が成長のモチベーションに

応援金の受給が決まり、大変喜び、『これからも頑張ります』と決意をあらたにしたところです。このように様々な方からの応援や支援を実感することができれば、本人の成長のさらなるモチベーションになると思います。

（自立援助ホーム ホーム長）



がん患者を支えたい！

私の将来の目標は、看護師になり、がん化学療法看護認定看護師の資格を取得し、患者さんの支援をすることです。看護師になるためには、大学に進学する必要があるため、学校の授業はもちろん、大学受験に向けての勉強も頑張っています。また、留学して、日本以外の国の看護についても学びたいと考えているので、高校在学中に英検2級以上を取得することを目指して、日々勉強し努力を重ねています。

（自立援助ホーム 高校3年生 さら）



過酷な毎日、少しでも手助けしたい

ホテル業と飲食業を掛け持ちしながら生活しています。本人の頑張りが功を奏し、生活保護からも完全に抜けることができました。しかし、睡眠時間を削って働き続ける生活は変わっていません。今年は高校を卒業できるよう、少しでも手助けができればと思っています。

（自立援助ホーム ホーム長）



学力がつくことは本人の回復の助けに

大変な経験をしながら、学校へ通い続け、社会福祉士という目標を持ち、学業とアルバイトの両立を頑張っています。ただ、学校は定時制であり、大学へ進学するためには、塾等で学習を補う必要があると思われます。

目標が持てたことは大きな支えになっているようです。また、学力がついていくことは本人の回復の助けになると思います。

（自立援助ホーム ホーム長）



自立援助ホーム・子どもシェルターまなび応援金とは

まなび応援金は、自立援助ホームや子どもシェルターで暮らす子どもたちの就学・就労・自立を支えるプロジェクトです。朝日新聞厚生文化事業団が主催し、社会福祉法人カリヨン子どもセンターの協力のもと、2020年春にスタートしました。

様々な理由から親と生活することが難しい子どもたちについて、公的責任として社会的に養護・保護し、養育に困難を抱える家庭への支援を行うことを「社会的養護」といいます。現在、約4万2千人の子どもたちが社会的養護のもとに暮らしています。児童養護施設のほか、自立援助ホームや子どもシェルターなども社会的養護を担う施設です。

原則、自立援助ホームの利用者は15～20歳（状況により22歳まで）、子どもシェルターも義務教育を終えた15～20歳未満を想定しており、運営するのは社会福祉法人やNPO法人などです。

家庭内暴力や育児放棄などで傷つき、これらの施設にたどりついた子どもや若者の中には、経済的な事情によって中学校卒業や高校中退で社会に出る人も少なくありません。彼・彼女らが「まなび」を通じ、自分の未来を選び取る力を育んでほしいと願い、プロジェクトでは返済不要の2種類の助成（就学金・資格取得金）を行いました。

就学金 高校などで学ぶ努力を応援

- 高校（全日制、定時制、通信制）などで学ぶための本人の努力を後押しすることが趣旨。
- 4～9月を前期、10～3月を後期とする。
- 6か月ごとに12万円を給付。返済不要。
- 現在学校に在籍しているか、申し込み年の3月末に学校を卒業した人。
- 国籍は問わない。



資格取得金 各種資格を取得する努力を応援

- 自立に向けて各種資格を取得する努力を後押しするために費用の実費を給付する。
- 資格取得に向けて必要な費用（授業料、教科書代、備品・交通費など）の実費を以下の基準で給付。
 - （ア）資格を取得できた場合は、かかった費用の全額（上限15万円）を給付。
 - （イ）資格を取得できなかった場合は、費用の7割（上限10万円）を給付。
- 対象とする資格は公的機関が認定するもの、または運営委員会が制度の趣旨に鑑みて認めたもの。
例：高卒程度認定試験、普通自動車免許、英語検定など。

対象となるのは、自立援助ホームや子どもシェルターで暮らしている方と、暮らした経験のある29歳までの方です。在籍・出身のホームを通じて集められる申し込みは、運営委員会によって審議されます。運営委員会は全国自立援助ホーム協議会、子どもシェルター全国ネットワーク会議、社会的養護出身者が運営する支援団体などによって構成されています。

2024年度前期 募集4～9月、内定通知10月、送金11月
2024年度後期 募集10～3月、内定通知4月、送金5月

2024年度の給付報告

まなび応援金運営委員会の審議の結果、2024年度には計696人に総額7060万1741円を給付しました。内訳は以下の通りです。応援金は皆さまのご寄付と朝日新聞厚生文化事業団が拠出しています。

※24年5月31日時点で手続き中を含む

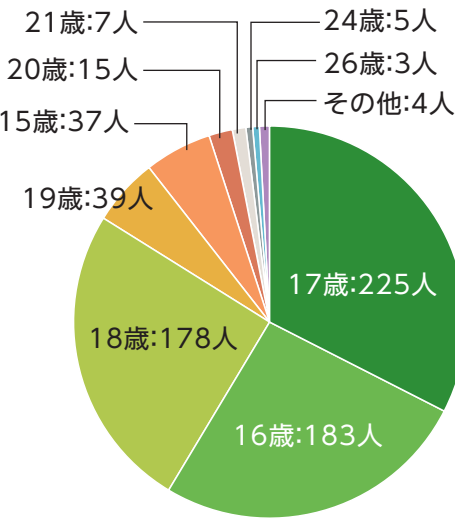
就学金

高校などに在籍する658人の子どもたちに対し、計6566万1000円の就学金を給付しました。在籍する学校は、高等学校全日制、定時制、高等専修学校です。

資格取得金

資格取得を目指す38人に対し、計494万741円を給付しました。資格の内容は普通自動車免許、宅地建物取引士、危険物取扱者試験などです。

応援金を受け取った子どもたちの年齢は、17歳が32%（225人）と最も多く、未成年が9割強を占めています。まなび応援金の給付は、申し込みと同様、自立援助ホームや子どもシェルターを通じて行われ、施設から申込者に届けられます。施設と子どもたちには、応援金の使い道や生活状況などについて報告してもらっています。



未来まなび応援金 新たにスタート!

まなび応援金は制度の一部を変更し、2025年度10月から「未来まなび応援金」として実施します。従来の「就学金」「資格取得金」を一本化。意欲のある子どもや若者が、高校生活で授業だけでなく、課外活動などで幅広い学びやかけがえのない経験ができるよう、より一層応援することを目的としています。

困難な背景を持つ子どもや若者が、過去に囚われず、学びを通じて自分の未来を自由にデザインし、自己実現していくためには、社会からの継続的な応援が必要です。「頑張ってもお金がないから何も意味はない」と無力感を感じることなく、確実に未来へ歩みを進められるよう取り組んでいきます。



未来へ羽ばたく力に ～うめさんが見つけた学びと夢～

自立援助ホームで暮らしながら、美容専門学校で夢の実現を目指しているうめさん（20歳）。「まなび応援金」を活用し、自らの学びの道を力強く歩んでいます。今回は、これまでの歩みや支援への思いについて、お話を伺いました。

「変わりたい」という気持ちが生んだ前向きな変化

うめさんが自立援助ホームでの生活を始めたのは、15歳のとき。宮城県内のホームから美容専門学校に通いながら、夢の実現に向けて努力を重ねています。

もともとは夜間定時制高校に通っていましたが、生活リズムが合わず、昼夜逆転の生活に悩んでいました。そんな中、理事長から昼間部への転入を勧められ、再受験を決意。同じ学校の昼間部に編入しました。

転入後は生活リズムを整えるのに苦労しましたが、2年生になる頃には成績が飛躍的に向上。そのきっかけは、過去に学んだ内容がテストに出題され、高得点を取ったこと。理事長に褒められたことが嬉しく、「次も良い点を取りたい」という目標につながりました。努力の末、学年トップの成績を収めるまでに成長しました。

また、軽音楽部では部長も務めました。消極的な部員が多い中、「部活の雰囲気をもっと変えたい」という思いでリーダーを受け、自ら率先して練習に励みました。勉強、部活、アルバイトと、今振り返ると「めちゃくちゃ忙しかった」高校生活。それでも時間を上手に使い、充実した毎日を送っていたと語ります。



「まなび応援金」が支えた進学の一歩

専門学校への進学には、大きなハードルがありました。

「経済的な壁」です。最初は、就職してお金を貯めてから通おうと考えていた時期もあったそうです。

そんな中、ホームの理事長がまなび応援金をはじめとする奨学金について教えてくれたことで、進学への道が開けました。また、周囲の方々に支えられ、アルバイトも継続し、計画的に資金を貯めることができました。

自分と向き合い、苦しみを乗り越えて

高校3年生の頃、自分自身の課題に悩む時期がありました。そんなときに取り組んだのが「自己分析」。自分の良いところも悪いところも受け入れ、どんな性格で、どんな仕事に向いているのかを見つめ直しました。

自己分析は楽ではなかったものの、周囲のサポートが支えになりました。物忘れが多かったり、言われたことをすぐ忘れてしまったりするうめさんに、職員さんたちは何度も根気よく寄り添ってくれたそうです。そうした小さな進歩の積み重ねが、大きな成長につながったと振り返ります。

また、人から悪口を言われたり、見下されたりすることも多く、思春期には傷つき、学校に行きたくないと感じたこともありました。「今では、悪口を言ってきた人たちも、自分に気づきを与えてくれる存在だったと思えるようになりました」と、前向きに語ってくれました。

将来の夢と「恩返し」の思い

うめさんの夢は、「お金持ちになって、ホームで暮らす子どもたちや職員さんをディズニーランドに連れて行くこと」。その夢がこれからのモチベーションになると考えているそうです。

また、後輩たちにはこう伝えたいといいます。「まずは自

分自身を分析して、自分がどんな人間で、何をしたいのかを見つけることから始めてほしい。焦る必要はありません」。そして、「小さな目標でもいいから、一歩ずつ進んでいけば、夢に近づいていける」と力強く語ってくれました。

うめさんは、周囲の人の支えと「まなび応援金」などの支援がなければ、高校も専門学校も通えなかったと、実感しています。

そして「これからは、少ないかもしれないけど、少しずつ自分も（支援を）渡す側になりたい」と話してくれました。

支援の輪が広がり、未来を照らす力に

うめさんの言葉からは、数々の困難を乗り越え、学びを通じて大きく成長してきた力強さと、支えてくれた人々への感謝の気持ちがにじみ出ていました。

皆さまからのご寄付は、未来を切り拓こうと学ぶ若者たちの希望となり、その努力を支える確かな力となっています。これからも、一人でも多くの若者が「学びたい」という思いを諦めずにいられるよう、ご支援の輪がさらに広がっていくことを心から願っております。



まなび応援フォーラム2025を開催

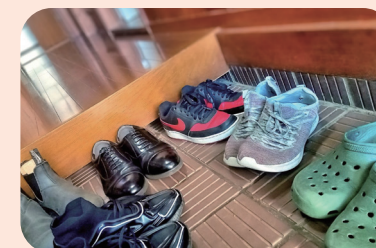
自立援助ホームや子どもシェルターで暮らす子どもや若者、支援者を対象に学ぶことの意義を伝える「まなび応援フォーラム」を、2025年1月19日にオンラインで開催しました。

基調講演では、弁護士・社会福祉士の安孫子健輔さんが「子どもの人権」の視点から、若者たちの声に耳を傾け、自ら未来を選択できるよう伴走することの重要性を解説。次にまなび応援金の利用者が4人がそれぞれの体験について語ってくれました。

ある若者は、まなび応援金があったからこそ高校に再入学し、努力の末に目標としていた成績を収められたことを、また別の若者は、支援を受けながら高校生活を続け、マイナースポーツで日本代表として世界大会に出場できた経験、さらに別の若者は、他の貸与型奨学金の返済や自動車免許取得にまなび応援金を活用し、将来の自立に向けて力強く歩みを進めていること、そして伴走してくれる大人たちの存在がどれほど心の支えになったかを語ってくれました。

支援者であるホームの職員からも、若者たちの成長や、資金が彼らの自立にとって不可欠であったという声が聞かれました。

まなび応援金の意義を再確認し、支援を受けた若者たちの生の声を聞く貴重な機会となりました。



ホームの生活での一場面

地域の”見えにくい”子どもたちへ

「地域こどもつなぐ応援金」新設のお知らせ

この度、当事業団は、社会的な困難を抱えながら地域で暮らす子どもたちの高校就学を支援するため、新たな取り組みとして「地域こどもつなぐ応援金」をスタートさせる運びとなりました。



「地域で見えにくい子どもたち」への支援の必要性

当事業団では、2008年度から、児童養護施設や里親家庭などで暮らす子どもたちの高校卒業後の進学を支援する奨学金事業を続けてきました。開始当初は、こうした子どもたちへの経済的支援はほとんどありませんでしたが、その後、多くの団体による奨学金が生まれ、国による制度も徐々に整備されてきています。

一方で、議論を重ねる中で、施設や里親家庭といった社会的養護の枠組みには入らないものの、厳しい家庭環境の中で生活せざるを得ない子どもたちが、地域社会の中に「見えにくい」形で存在していることに、改めて気づかされました。

例えば、「修学旅行に行くお金がない」ために、友達との大切な思い出作りを諦めなければならない子どもたちがいます。また、親が病気がちで、まだ高校生であるにもかかわらず、アルバイトをしながら幼い妹や弟の世話を一人で抱え込んでいる「ヤングケアラー」と呼ばれる子どもたちもいます。障がいのある親の支援を、本来担うべき大人が十分にできないために、子どもがその重責を負っているケースもあります。

また、児童養護施設から家庭に戻り、その後支援機関との関係が無くなり、孤立している子どもたちも少なくないと言われています。

こうした子どもたちは、支援の網の目からこぼれ落ちてしまいやすい状況に置かれています。そして、多くの場合、自ら助けを求める声を発することが難しく、その存在や困難が見過ごされがちです。

私たちは、このような地域で見えにくい子どもを応援する、新しい取り組みが必要だと考えました。

「地域こどもつなぐ応援金」とは
～過性ではない支援を目指して～

「地域こどもつなぐ応援金」の対象となるのは、20歳未満の高校生です。具体的には、以下のどちらかの状況にあり、かつ、事業団と連携する特定の支援機関からの推薦を受けた子ども、若者たちです。

- (1) 児童養護施設や里親家庭などの社会的養護で暮らし、家庭に戻った子ども、若者。
- (2) 地域で家族と暮らし経済的に困難な状況にあり、また家族の状況から社会的養育を特に必要とする子ども、若者。

この応援金には、「単に経済的な援助に留まらない」という大きな特徴があります。私たちは、「つなぐ応援金」を、子どもと家族、地域、そして子どもたちに関わる様々な社会的養育の関係機関等がつながり・連携を深めるための一つの「ツール」として捉えています。

応援金の申し込みは、子どもたちが継続的な支援を受けている児童家庭支援センターや自立援助ホームなどの支援機関を通じて行われます。これらの機関は、日頃から子どもたちやその家族に寄り添い、様々な課題解決に向けてサポートを行っています。応援金がこの支援プロセスの中に位置づけられることで、子どもたちと支援機関の結びつきが強くなり、経済的な困難だけでなく、心理的な不安や社会的な孤立といった問題にも、より効果的に対応できるようになります。

私たちは、このような支援機関との連携を通じた「継続的な支援」こそが、子どもたちの将来の安定にとって不可欠であると考えています。単に一時的に金銭的な援助を行うだけでなく、こどもたちが様々な社会資源とつながりながら、自分らしく歩める環境づくりを目指しています。

〈給付内容〉

応援金は、年間10万円を上限とし、高校を卒業する際には、「卒業祝金」として2万円を加えて給付します。

これらの応援金は、学納金や教材費といった学校生活に必要な費用だけでなく、部活動の遠征費や道具代、習い事や資格取得のための費用など、子どもたちの成長や社会とのつながりを育む様々な活動に活用していただくことができます。

また、この応援金には成績審査がありません。困難な状況に置かれながらも、希望を持って前に進もうと努力するすべての子どもたちを広く応援したいという考えからです。支援機関からの推薦というステップを設けることで、本当に支援を必要としている子どもたちに、支援が届く仕組みとしています。

給付は、給付総額が予算を超過した場合には、やむを得ず一律に減額して給付させていただく場合がありますが、原則として、規定に定めた要件を満たす希望者全員に給付します。

2025年10月からの事業開始に向け、引き続き準備を進めてまいります。

温かいご支援が、子どもたちの未来を拓く力となります

この「地域こどもつなぐ応援金」は、ご寄付によって運営されます。当事業団は、特定の企業や団体からの資金に大きく依存するのではなく、多くの方々からのご寄付を原資として、公正かつ着実に事業を遂行しています。

子どもたちが抱える困難は、一人ひとり異なります。経済的な問題、家庭内の複雑な事情、地域での孤立など、その要因は多岐にわたります。しかし、どのような状況にあっても、子どもたちが安心して高校に通い、学び、友人との関係を築き、自らの可能性を信じて未来に向かって歩いていけるように支えることは、私たち大人の共通の願いであると考えています。

皆さまからのご寄付は、子どもたちの学費となるだけでなく、新たな世界を知るための学びの機会となり、部活動に打ち込むための道具となり、そして何よりも、「自分は一人ではない」「自分を応援してくれている人がいる」という希望の光となります。それは、彼らが困難を乗り越え、自ら未来を切り拓いていくための、かけがえのない力と考えています。

これからも皆さまとご一緒に、「支援の輪」を広げていければと願っております。引き続き、ご理解とご支援をいただけますよう、お願い申し上げます。

みなさまの応援を力に



朝日新聞厚生文化事業団は、能登半島地震で大きな被害を受けた穴水町で、2025年1月18日に、子どもの心のケアを考える講演会を行いました。当日は、2人の児童養護施設・里親家庭等進学応援金を受ける学生もボランティアスタッフとして参加し、運営をサポートしました。

◆児童養護施設・里親家庭等進学応援金

主催：朝日新聞厚生文化事業団、協賛：公益財団法人 原田積善会

◆自立援助ホーム・子どもシェルターまなび応援金

協力：社会福祉法人 カリヨン子どもセンター
協賛：公益財団法人 原田積善会

2024年度 こども応援金 事業報告書

2025年6月18日発行
発行者 社会福祉法人朝日新聞厚生文化事業団
デザイン・イラスト かえるぐみ



社会福祉法人
朝日新聞厚生文化事業団

本部（東京）
〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
TEL 03-5540-7446 FAX 03-5565-1643

大阪事務所
〒530-8211 大阪市北区中之島2-3-18
TEL 06-6201-8008 FAX 06-6231-3004